



大杖桑國考

下

ル 3  
4003  
2



大扶桑國考下卷



大壑平篤胤撰述

門人

和泉國

上條臣杖

校

武藏國

安藤直彦

同

武藏國

沼谷正彦

八

東方朔十洲記云扶桑在東海之東岸一万里東復有碧海。海廣狹浩汗。與東海等。大碧水既不鹹苦。正作碧。色扶桑在碧海之中。地方万里。上有大帝宮。大真東王父所治。知也。多林木。葉皆如桑。又有椹樹。長者數十丈。大二千餘圍。樹而々同根。偶生更相依倚。是以名扶桑。彼國之東海東岸。とは。謂。四。東表の立。す。徐州揚州の堺。

淮水といふ辺の海岸と云ふ其岸より一万里より扶桑  
国なる由にて。此を彼国の里法をれど。拘はるは足らぬ。実  
彼岸より此岸まで。皇朝の里法より。三百餘里の海上なり。○上有太帝宮云々は太帝と  
は太昊伏羲氏と云ふ。淮南子曰。史記の封禪出れと  
小太帝と称せること。数所に見えて。泰帝とも出する。史  
記正義より。索隱から。太帝。謂太昊伏羲氏と推し。玄家の  
諸出小。扶桑太帝と称せる小。知へし。然るはまゝ大真  
東王父とも云ふ  
由。三五本。多林木。葉皆如桑。地形訓。東方曰棘林。曰  
桑野。と有る。乃此林木と聞えり。然る小其葉を云ふ似  
これ。実は云ふ非ざる故。如云。と云るれり。○又有提

九

樹云々は。山海經の廣注小。此文引交。兩幹同根。相為依  
倚。故名扶桑。猶之扶荔。扶竹。扶荀。皆取此義也。と云へり。扶中  
字用  
此義なり。提を玉篇小。冬子とわり。此小も其義小用ひしれ  
り。されど字彙小。此字と云ふ子用ふると。俗用小。非を  
る由云ふり。毛詩小干嗟鳩兮。無食茲甚。とわ  
り甚をれんち提の古字なり。  
僊人食其提而一體皆作金光色。芝翔玄慮。其樹雖大。其葉及  
提如中夏之桑也。但提希而色赤。九千歲一生。實耳。味絶  
耳。香義地生。紫金丸玉。如諸夏之瓦石。真僊靈官。變化万端。蓋  
無常形。亦能有分形。為百身者也。  
神異經。東方有樹焉。高八千丈。敷張自輔。其葉長一丈。廣

六尺其上有蠶作繭長三尺線一繭得絲一疋有搗子長三尺五寸圍如長と云へり。十州記云今挙る如く如云と云ひて。真の表とは云へらると。此経は真の表として。如此云するを妄かり。然れハ此経は東方朔が記と言ひ傳ふれど決りて後人の偽託かり然るも同人の記せるも斯の如文相違の有るべくも非好むれりされと古文物なる故り其妄徒いしむ。因わらむ時其論はむと云。右二條も十州記扶菴国の全文れるがこゝる神僊の古説也。我が神州の神世の有状を傳ふし説られる。古学の古眼として見るべし。俗学の今眼として見ごとく勿れ。其もまた碧水既不鹹苦。正作碧色と云

る。因地利しも廣うらで。然る長高き大樹の茂り滿有むまは。其影の映りて水色うれり。又碧小見やへく。由り大樹の蓄れる如く。真水の盛なる者れば。潮まよ然しも鹹苦かる。又しき道理なり。この道理を謂ゆる究理の字を精究も自つうらま。右は僊人と云るも。神世の神等をいふり。其も堪と食する故は非好むも。僊れしる神等はみか。身小光耀ありしこと。古史傳小委く説たり。又真僊の靈官なと変化万端小て数多分形せりと云ふこと。此も然る説小て神より分形のこ小非也。合體もまよ自在小も。変化もと七万端小て坐しれり。此等のもも。知まふしと思はば。此等のもも。神與と説きて知るべし。由

地小紫金丸玉を生むること。尾石の如しと有る。こは神  
世の幽頭いま別れざる時。ふ々有りしかと覺ゆる。頭  
幽をひに別れて後小さるるともは幽界小屬て。頭界小し  
いと得難くも成りぬる。此事も古史傳子委く説く事  
不藏金玉則紫金見于深山。服飾不踰祭服。又皇国の古  
則玉英出ると云ふ意をへ毎ましくもあらけ。又皇国の古  
灸椹の木とは言えぬ。其子類する諸大樹の有しこと。  
古出どもに昭々として今現るその埋木の出ると見るは  
更小も云ふ。其大樹とも然か。草木甲ひて山と成り。  
苔生して巖と化りて存する。人えと知らけ有る。  
近ごろ伊与国なる明月といひし僧の寛政六年著せる。  
扶桑樹傳といふ物を見る。我郷有扶桑樹而地僻人質世

世未傳之。豈不遺贖乎。客歲余南遊。登海上諸岨。以聚見扶桑  
之曰。毀其山海之間。巨巖細石。尽有養質。色則玄黃紫。青白  
純雜。無軌余。熟視之。愈是木之化也。石者也。故縱橫木理。備存  
其焦而理者。今見在伊与嘉多二郡。山海數十里。其海潮之中  
往々有磯者。其上潮勢極惡。判然不可由。昔海舶所畏。悼也。  
其最途者。暮春之初。海潮天落。則揭厲就之。用獨頭斧。剖取  
之。余亦得之。而還。其質如炭。堅美純粹。研之。則黑於漆。光溢於  
流。得者珍重。古稱扶桑樹。余實觀之。匪聞斯傳也。と云へり。  
此出は八葉むりの物なり。今奉る文もその中の一葉は  
終多多く作り記せる物なり。今奉る文もその中の一葉は  
ウと見るが。こは今存する事實を記せる。て其終多多く  
と見られを採りつ。これと此理木と扶桑樹と決する。信  
られぬ。説るり。國人は扶桑木といふも有る。趣かれば多く  
は桂といひ傳ふる。そ己も木を得て藏する。其質は  
石炭の如く。子て堅実なるが漆より黒く。木理も詳ならず  
ねど。實も桂木もやと思ふ。質の無きし。非も又質の然し  
も堅黒ならぬ所。櫻も非ざる。と思へり。も多かり  
橘南溪が西遊記。明月この出を諸越子傳り。ひと長崎  
小到れる。子過り。いてや。因も古き大樹の古説を標て。神世

の春を知らぬ人の遠き眠字驚かしてむ。其は景行天皇紀  
十八年七月の所子。到筑紫後国御木居於高田行宮時。有僵  
樹長九百七十丈。号百寮。踏其樹而往來。時人歌曰。阿佐志毛  
能滿概能佐烏。廢志摩幣菟者。涌伊和。哆羅秀暮。弥開能佐島  
廢志。朝霜の御木の裨橋百寮。い渡り。爰天皇尚之曰。是何樹  
也。有一老父曰。是樹歷木也。嘗味僵之先。當朝日暉。則隱杵嶋  
山。當夕日暉。則覆阿嶺山也。天皇曰。是樹者神木也。故是国宜  
號御木国と有り。筑後国凡土記。三毛郡昔者棟木一株  
前国藤津郡多良之峯。暮日之影。蔽肥後国山麻郡荒物之山。  
因白御木国と見えたり。今も其邊。教郡小見。埋木。阿  
りて底一面の大樹あり。其木。西原。晁樹より贈  
れる。小其木理と察れむ。棟木は非を。実子。榎木子有り。

この榎木の九百七十丈。町直しては大凡二十八町を  
有べし。こと僵れて幾百年の星霜と経らむ。其間  
を指枝かど益々朽折れて。幹木の存れること言ふも更  
なれば。其立木子て在し。一里餘りの高き。必有  
く。木の太さも。慥小五六百尋。不とも有り。然れば朝日小  
は肥前の杵嶋山を隠し。夕日小は肥後の阿嶺山を覆せり  
と云ふこと。さも有へきこと。古事記仁徳天皇の段。此  
其樹之影。當且日者。遠路嶋嶺。夕日者。越高安山。故切。是樹  
以作船。甚捷行之船也。云々といへり。下も。河曲。日本記  
も此。船材の事を。遠江国大井河より流れて。河曲。日本記  
由子。廿大十圍と有り。何れ。是を。知ら。父。ま。按。子  
小肥前。凡土記の佐嘉郡の條。昔者。樟樹一株。生於此。村。幹  
枝秀高。莖繁茂。朝日之影。蔽杵嶋郡。蒲川山。暮日之影。蔽養父

郡草横山也。日本武尊巡幸之時、御覽樟茂栗、曰此国可謂栗  
因曰栗郡、後改号佐嘉郡、見五播磨凡士記、明石、馭家  
駒手、御丹者、難波高津宮、天皇之御世、楠生於丹、朝日、蔭淡  
路島、夕日、蔭大侮島根、仍伐之、楠造舟、其迅如、一楫去、越七  
浪、仍号速島、云々、有る、内、今昔物語小、昔近江国栗太  
後とも併して思ひ辨ふべし。  
郡小、大なる、杵樹生とりり、其圍五百尋分り、然れも其木  
の高さ、枝を差とる程と思ひ遣はべし。其影朝小丹波国  
小内し、夕小ハ伊勢国子差、其間子其国の志賀栗田、甲  
賀三郡の百姓、この木蔭小覆れて、日當らざる故、田畠を  
作り得こと無し。此よりて、其郡の百姓ら、天皇小此、由  
と羨、天皇掃守の宿禰等と遣して、此樹を伐倒さしめ給  
ふ。其より後、百姓田畠を作ると豊饒あることを得たり。彼

羨しよる百姓の子孫、今その郡小有りと見えたり。杵を  
ハ、ソと訓む字、かると撰者、クワの木子用とるなり。  
其もその木の在りし所、栗田郡と云ふ、知べし、古事記傳  
に、近江国栗田郡、語子傳、云々、古小栗の大木ありて、  
其枝数十里、はひこれり、故栗木と云ふ、今も地字、堀れを  
栗の実、まゝ枝をとり、まゝ、クワモと云て、里人の薪子用  
ふる物ありて、土中より掘出、是も其栗の葉なりと云り  
此類の語り傳、る不国、性、ありされ、上代、是、殊  
かる大木の如、まゝ在りし、こと知べし、云れし、此木なり  
謂、少る、ス、クモ、土、非、石、非、柴、の、葉、の、塊、り、如、  
き、物、か、れ、も、栗、も、非、木、也、定、り、難、し、但、し、幹、木、の、石、子、化、れ  
る、が、多、く、あり、其、を、固、人、の、栗、木、の、圍、五、百、尋、と、云、つ、と、  
を、栗、の、化、石、と、云、ふ、と、を、  
は、二、百、五、十、丈、圍、分、り、此、を、間、小、直、り、て、四、百、十、六、間、半、餘、を  
れ、む、其、木、口、の、徑、り、百、三、十、一、間、半、餘、む、り、有、べ、し、是、ま、  
甚、く、も、大、樹、子、有、り、る、神、異、經、に、東、方、荒、中、有、栗、木、高、二、十、  
丈、栗、徑、三、尺、其、殼、赤、其、肉、黃、白、味、甘





其根も海底に深く廣くとわりて見也。然して玉津嶋明神  
の坐次山を見り。此を見紛ふへくも無き。松の大木の立  
かがり化れる山あり。節ありし所。枝さしとる所なと有の  
り。子見也。人々詣て見て知るべし。此、辺見遊れり時、若  
く伴ひしる。此、山を松、木を和哥浦なる平石とて、楠木な  
ると、木目ちよ由縁を語る。信、人、有、し、う、と、信、む、る  
人、も、有、り、然、れ、を、因、人、も、此、山、を、伽、羅、木、山、と、云、ふ、な、る  
其、そ、の、木、の、さ、ま、も、似、れ、を、分、り、斯、て、此、辺、の、海、を、見  
て、十、州、記、に、碧、海、と、い、能、し、も、云、へ、り、と、始、り、て、知、り、其、  
は、海、底、も、一、面、に、青、き、木、化、石、を、故、に、具、々、映、し、て、水、面、の  
碧、色、な、る、ゆ、て、大、和、を、廻、り、て、伊、勢、国、に、出、て、外、宮、へ、参、り、て  
内、宮、の、方、を、参、る。外、宮、の、社、地、より、謂、つ、る、天、岩、戸、と、云、ふ  
辺、へ、行、く、如、ま、て、一、楠、木、の、横、は、れ、る、化、石、あり。彼、二、見、浦、も

一楠木の根は海に在りて。陸に出る所も山と化れる子  
て。大小二羽の謂ゆる立岩也。その連きの欠て奇しく立  
とるあり。凡木化石を見り。常に種々の木理を見知り居  
る。其、石、を、熟、て、見、れ、る、大、抵、も、こ、れ、某、木、の、化、れ、る  
石、を、と、云、は、り、の、こ、を、准、も、見、極、り、ら、る、物、を、大、う、と  
て、古、学、子、を、さ、か、ひ、人、と、い、う、る、と、ま、て、心、を、著、へ、し、大、う、と  
余、見、通、れ、る、国、々、の、中、に、木、国、を、う、り、木、化、山、の、多、き、は、毎  
し、此、の、殊、に、深、き、由、り、と、あり。餘の国々も木化山と毎  
くは有。抑彼、国、に、坐、を、伊、太、祁、曾、神、と、申、も、熊、野、本、宮、に、坐  
も。須、佐、之、男、命、の、荒、魂、神、に、坐、て、遠、近、神、世、を、天、止、より、種、々  
の、木、種、を、持、降、り、て、外、国、々、と、も、普、々、見、巡、り、給、へ、る、が、所  
思、し、食、以、御、旨、ありて。其、皇、国、の、地、の、三、植、生、して、後、小



何とせむ。されん此る竊理の垣キ字フミヤブ踏破りて。垣外なる神理  
と探ねて悟るべきをれり。凡て究理と云ふこと漢土人の早  
人らも殊子いひ言ふ下ふると。今し皇国人も其説を言  
ひて何くれと論ををるも。實も究理し得たりと。聞ひる説  
の毎子しも非ざる故也。吾もその究理せらるる限りも。究  
理説をも説くなれど。實も人の智をかきり有て。如此きと  
ども。当りては究理の論小及むべき物なり。然る字迹  
こ。漢學者といふ徒字見る子也。謂ゆる西哲らが究理り  
説小縛せられて。其徒もろこしの旧き究理字を笑ひこ  
為れ。余より此を見れば。五十歩百歩の勝者にて。其五十歩  
内なる垣内は居をくこて。垣外なる神理まで。目を飛  
耳を長くし。手足を伸る學者を。吾いまよ。此を見ん。唯  
小さくし。け小物言子。一種の鈍。其も。大神の天より木  
学と添出せり。とこそ思ふるれ。其も。大神の天より木  
種と持降りて。植生し給ふる神世字思ふ。天皇の御大祖  
迹。藝命の天降坐せる神世より。は。まよ。遠き神世か

まよ。幾千歳前なり。と。ひ知る。り。は。こ。世の始り。国  
固め給ふ時かりし故也。はる大樹と蕃茂も。下ま。常小異な  
る。天つ木種と持降り坐して。国の鎮と物も。山岳の骨  
まよ。国土の骨とも。為む。の。神意かりし。其項。天地相去  
こと。猶遠く。冷除い。まよ。立さ。りし。故也。さる大木と。栄  
え。延。び。る。と。所。思。ふ。れ。り。多。れ。る。彼。扶。茲。木。也。此。神。の。殖。生。し  
或ハ十州記ハ九千歳一。生。實。し。有。る。子。依。れ。る。伊。邪。那。岐。神  
の。御。世。より。生。し。ぬ。へ。る。樹。かりし。山。岳。は。国。の。鎮。か。る。こ  
と。万。葉。子。不。益。山。を。日本。の。山。跡。国。の。鎮。も。生。を。神。も。云。こ  
と。成。れ。る。山。も。云。と。休。を。石。を。国。土。山。岳。の。骨。も。云。こ  
と。及。晋。の。張。華。が。博。物。志。子。地。以。名。山。為。捕。佐。石。為。之。骨。川。為  
之。脉。草。木。為。之。毛。土。為。之。肉。三尺以上。為。眞。三尺以下。為。地。と  
云。り。實。も。此。は。て。迹。ハ。藝。命。天。降。生。して。後。る。天。地。相。去。る。矩。

今の如く定るへき由ありて定まりし故也。其後漸く  
 其大樹ともの山岳と成り巖石と化りて。国の鎮免の骨と  
 は為れり。大古は天地相去ること遠くはざりしが漸く今  
 少く其傳遺りて。徐整が三五曆記れと云。天日高一丈地日  
 厚一丈如此。万八千歳天極高地極深かと云へり。思ひ合す  
 い然れを彼国の古説よ。東方の域は大樹ありしと稱し。  
 まと上第四條なる。青邱国の所引とす。十州記長州の説  
 かと。其大樹ともの仍存せる間。神仙の往来つゝ見  
 覺りて。語り継とる。上の筑紫小僵れて在りし大木。近江  
 国かりし大樹を更れり。肥前播磨との大樹を適し神世  
 の遺木の長存せる物と知べし。今の世も然る大木あり  
 やと尋ねる子。文化九年の

事々々紀伊国熊野山の奥三十里たり。大木の榎守  
 伐出せる。木百二十抱高。三百二十間餘り。南北へ差  
 角。小して廿五間。木口三十四間。四尺八寸。存る。と  
 の杉七本。その外六七間以下。諸木多く。松。楓。推。柏。柳。竹  
 南天。木も寄れり。と云。能野の山奥。大杉。明神。と祀  
 り。木も三十尋餘り。有り。といふ。ま。陸奥。国の郡。知ら  
 り。岡村。といふ所。小。大杉。明神。とて。三十三尋餘り。の木。わ  
 る。由。なる。が。是。は。より。大。き。か。る。木。の。有。り。と。云。こ。は。未。だ  
 くら。大。樹。と。成。れ。る。大。地。も。不。大。小。成。り。行。く。間。も。木。も。れ。り。多。く  
 べき。量。の。自。然。子。定。れ。り。と。見。え。て。右。の。大。杉。か。と。神。世。の。大  
 樹。子。地。て。も。小。木。か。れ。い。今。も。斯。む。り。の。木。さ。へ。多。く  
 と。尚。え。と。有。り。と。云。然。る。と。云。弾。國。高。山。の。辺。子。異。木。あり。て  
 枝。も。葉。も。こ。も。三。つ。子。受。れ。し。樹。か。る。か。其。蔭。一。里。む。り。と。蔽  
 ひ。て。今。も。立。ち。栄。え。有。り。と。云。る。人。わ。り。ま。と。信。濃。国。戸。隠。山。の  
 奥。深。き。所。よ。一本。子。し。て。二。三。里。の。間。子。は。ひ。蟠。れ。る。松。木。わ  
 り。冬。より。春。子。至。り。五。丈。餘。七。霊。ふ。所。か。る。故。子。厭。れ。て。直  
 立。る。子。と。能。く。地。小。か。り。て。低。れ。る。昔。より。其。幹。木。子  
 見。し。人。な。し。と。云。こ。も。尚。り。此。等。の。大。樹。と。もの。を。存。不

其国々の人子委く向て其、  
実否と知ま不しき事なり。其、  
大樹の事を云ふ。太戴礼記五帝德篇に孔子が顓頊の徳  
を語る所。潔誠以祭祀。乘龍而至四海。北至于幽陵南至于  
交趾。西濟于流沙。東至于蟠木。云々と云へり。史記が顓頊  
家語にも此事の見えし。大戴礼と採れり。呂氏春秋  
の増注に蟠字の古音扶かれ蟠木を名けり。扶木なり  
と云ふ説も一あり然る説は問われし。此を古注にも  
蟠木なりと云ふ。後ふし。史記の黄帝本行記に帝東及  
蟠木。注に日下と廣黄帝本行記には東至蟠木。此木は  
其増注及び史記注に山海海外經云東海中有山焉名  
曰度索。上有大桃樹。屈蟠三千里。東北有門名曰鬼門。萬鬼所  
聚也。天帝使神人守之云々。説郭ト舉ぐる。玄中記に東方有

桃都山。山上有一大樹。名曰桃都。枝相去三千里。上有天雞。日  
初出時照此木。天雞即鳴。天下雞皆隨之。有木の事なる  
が但し今傳に山海經に右文あり然れ。是ま我々神世  
の古傳に。出雲國の伊賦夜坂の坂本ありし。桃木の傳子の  
訛れた説なること疑ふ。一切經音義に山海經と引く。文  
に桃都山と見え神異經に鬼府山といひ。述異記に  
扶桑の域内と爲し。述異記に日本國有金桃其実重  
一斗と有り。か不本編の黄帝傳に諸虫を引きて委く記  
し。并ふると。右の如かる。古人の皇國に扶桑國とい  
ふ名と當ると。実小よく叶へり。然る小松下見林が異称  
日本傳に扶桑東夷國名。在東海中。人有誤以扶桑為日本。別

號者蓋日本近日所出淮南子曰日拂扶蘇故率合為日本事  
杜佑通典東夷上載日本東夷下載扶蘇詳說其風土可以此  
自知扶蘇非日本也と云るを却て非かり。此松下氏が説か  
引り本出よ然るを其通典に日本と扶蘇国とを別子載  
就て見べし。疑なく我が武烈天皇の御世  
也。其扶蘇国の下と云るは。疑なく我が武烈天皇の御世  
子。皇国人の奸猾き者かし渡りて世過の術計は僧形と成  
りて。皇国の実事と否ぬ妄談と云うち交りて語り欺ける  
と。杜佑が信とる小そ有るは古く御国人まは他国人も彼  
せる安信子兼て其国籍子記せる類に計ふる小暇あらば  
今こゝ子通典の説と次々本文とるし注し弁ふるは准は  
べし。知

十

杜氏通典云扶蘇南齊時聞焉廢帝永元初其国有沙門慧  
深来至荊州说云扶蘇在大漢国東二万餘里地在中國之  
東

十一

南齊の廢帝が永元初に皇国より武烈天皇の元年に当れ  
其頃皇国より沙門をかき時れまは。此奴々の国子  
渡りて。率道心者と成れること知べし。和漢古今とも  
よき者の毎さして国名と称せむ小何として日本と云はて。扶  
蘇ト云けむと思ふ。此も彼国人元より日本と云はて。め  
て扶蘇を貴ひりて皇国小て。此項已に扶蘇国と当て。さ  
も稱ひむ故にかく稱せるなり。是も此奴が奸猾なる所

かる。斯て彼国の東方に大漢国と云ふ国も毎きと。此僧が  
心え。漢土の東に在る国を云ふ意なり。此は大漢国と  
中国と重複して二つとせるも記者の誤り。文献通考に大  
五千餘里。文身在倭国。東北七千餘里と云ふも妄なり。此の  
みかりを漢唐に他客の語を誤り傳へて。毎き国字有りと為  
し記せるも  
サツラ文

十一

其土多扶桑木。葉似桐。初生如華。国人食之。実如梨而赤。績其  
皮為布。以為衣。為錦。作板屋。每城郭有文字。以扶桑皮為紙。  
每兵甲不攻戰。名国王為乙祁。貴人第一者為大對廬。第  
二者為小對廬。第三者為納咄沙。  
扶桑木の扶桑。彼処に渡りて後。其国人は神異經なる。東

十

方小森林あり。其葉の長さ一丈。その椹の長三尺といひ。ま  
東方に梨樹あり。其子径三尺。靱を白く素の如し。菓子  
して食ふ。地仙の衣服と為れり。と云ふ説字聞て。其説字混  
合しとる妄説なり。神異經に合して皇国小元より板  
屋と作ることも古風にして古くは今の城郭もこの如き嚴  
密に構へては必ずしう合り。国に孔丘氏も云へり。其  
文字も元より神字なり。此頃を既に漢字とも用ひ。其  
も合り。扶桑皮をも紙と為ることも扶桑も扶桑をり。此  
は更なり。今も何樹の皮をも紙と作れぬ。古も然るも  
さ。毎しと云ふべし。攻戦なきも非好とも。彼国れど小

十二

比依る子。攻戦と云はり。是の事子非文。されど兵甲かき小  
非されども。常よも櫃子納めて有るも。かく云る小や有む。

○名国王と云より以下。其論長れれも下子云べし。

十二 国王行有鼓角導後。其衣色隨年改易。甲乙年青。丙丁年赤。

戊己年黄。庚辛年白。壬癸年黑。有牛角甚長。以角裁物。至勝

二十斛。有馬車鹿車。人養鹿如牛。以乳為酪。

皇国小鼓も角も早く有りて。神功皇后の韓を伐多ふ所を  
くも見え。神世も古く岩笛ありて。御幸の時小。御前も侍  
奉れり。所思れむ。上古は常の御幸も用ひ多し。其も  
有しを見て。かく語をり。聞の其衣色隨年改易云て。已

前子は師説を後りて。皇国もて干支を用ひ多し。武烈  
天皇より九代百年餘のち。推古天皇の御世より此と云れ  
む。武烈天皇の御世頃。干支を用ふること毎りしと思は  
る。非小。最古く有しこと。近文程小思ひ得た。其を弘  
仁歴運記考小論へる。以視て知べし。ひれど其年の干支隨  
り。云こも未思ひ。此は月令。四時と王吐。後ひ  
て。衣服の色。易ふる。由る。漸て其口合せと  
る。安んずらむ。○有牛角甚長云は。彼国も車牛車の有  
るを見て。其子勝む。馬車鹿車あり。言ひ。彼国も牛酪  
字作ると見て。其小勝む。鹿酪と為るといひ。牛角の強  
死由と。安んずらむ。



有赤梨。經年不壞。多蒲桃。其地也。鐵有銅。不貴。金銀。市無祖  
稅。其婚姻法。大抵与中国同。親喪。七日不食。祖父母。喪五日不  
食。兄弟。伯叔姑姊妹。喪三日不食。設坐為神像。朝夕拜奠。  
不續經。嗣王立三年。不見國事。自宋孝武帝大明二年。罰賓  
有比丘五人。遊行至其國。始通佛法像教。

皇国小元より梨ありと云ふも更れるが。蒲桃と云ふ物  
も。廣東新語に。蒲桃樹高二三丈。其葉如桂。花開自春至冬。叢  
鬚無辨。如剪黃綠絲。球長寸許。其實如蘋果。色赤黃綠。而香甜。  
在穀殼厚。半指核。小如彈子。与殼不相連。屬搖之作響。有て。  
皇国よんかき物れり。按むるよ。五雜俎より華夷花木珍玩

考れどに。葡萄と蒲桃と出るとあり。然れども此も葡萄と  
云ふをらむ。こゝ皇国に固有の物れり。蒲桃のよと近く後  
蒲桃図説といふ物。兼貞文主の妍芳園  
に委く見えたり。武烈天皇の御世頃。いふや。銅と埒こ  
と。壱りしり。鐵をいふ多有り。此文も。每銅有鐵と有  
へきや。記者の錯れりあり。此頃を凡俗宜しく。外国とも  
如く。随しく金銀を貴ぶても。壱りしれり。市小租稅以るこ  
と。壱り非ふれども。此頃を不交易して有し。形り。其婚姻  
法。大抵与中国同。親喪云々。此をいふも。難なく。是頃を然る  
事も有る。思はる。仁賢天皇の  
御世始りの所。○自宋孝武帝大明二年云々。宋と謂ゆる  
謂ふと見へし。

劉宋に世かり。その孝武帝が大明二年に。我が雄略天皇の  
二年に當れり。武烈天皇の御世より四十年余り以前より。  
仏法の名字とも知れる時あり。然るに如此しと云ふる。例  
の妄談なり。何子奸猾れる奴隷らをや。欺るると以て。扶  
桑國と云ふを皇國と當り。乃て右通典の文中に。名國  
王と云ふより納咄沙と云ふまで二十九字は。殊小扶桑と名告  
しは。皇國の事なる由を知へしと文れる故。此は表して其  
由と述べて。名國王。為て祁貴人とは。武烈天皇の大御父。仁  
賢天皇に坐して。御名を古事記に。意富祁命と云ふ。日本  
紀に。億計尊と有れり。祁貴人とい。即この天皇の御事

に。養古登と申れり。敬ひ等御稱する由を語りけむ故  
に。其言に對し。貴人とは云ふるなり。然るに此は扶桑國王  
記者杜祐が。大對廬小對廬とい。對廬の字決りて誤字なり  
然るに仁賢天皇の御名も。顯宗天皇に坐して。御名を古事  
記に。遠祁命と云ふ。日本紀に。弘計尊と云れり。此は  
御兄とい。様なる御名なるが。御兄を大と申し。御弟を小  
と申して。稱す奉れる御名なり。然るに何して。右の如く  
誤れる也。今その誤れる趣なくさく。思ひ回らせ。斯て  
此御兄弟といひ。小儀り相ひ坐して。御位に即給はせりし  
故に。飯豐皇女。志を。天皇の。行ひて坐し。頃のこと

と覺えて悟れると。第一云く。第二云く。第三云くと三王のな

坐に如く誤れる也。さるも納吐沙の字も飯豊と申

り誤字なり。上云く。ことく南祚の廢帝が水元初年は武烈天

皇の元年小当れり。彼奴が御国より幾くるも其以前なる

こと著しされと顯宗天皇に賢天皇の御世頃の趣字悟り

けひは。さも有へきとあり。是と以て皇国を除きて。外は扶

桑と云ふ国をきとて弁ふべし。何を見林が説く非なら

や。井沢長秀が俗説弁といふ物も扶桑国字以て日

本より稱と覺えとる者ありとて見林が右の説を引文按

をるも日本上古よりの号多し。浦安国豊原中国千五百

秋瑞穂国秋津洲大倭国まゝ日本と以て天下の号とせり

かゝる名稱あるを唱へて。他国の号と取りて。我が

国の号とて。國史小警きが故なり。も扶桑の者も誤り

は掌と有りて笑ふべしと記せり杜佑は唐の大家とるも

奸僧も妄終り欺りて泰漢以前の古も檢せ文扶桑南

存時。南番といひ見林も其欺を受て。又説く我が國史と

を檢見もること精々らる長秀まゝ國史も明かりと自許

す。つゝ見林が後馬に乗れり。今○文政九年の二月の末

に。此編の初稿畢りて。同十年の七月頃。門人ら小思ふ

昔わらひ言ふと示せり。上野、國館林、殿人生田、國秀

いひ遺りらく。扶桑大樹の皇國の地。生榮さりし考證の

著明なること。誰か言加へ侍るべき。然もあれと。其神樹を

今の何木も何れの地も生とりと云く。ことの詳からぬハ

少々心も飽く。以思ひ侍る。お。極めて強説ひ侍り。べけ

れと。試小記して御定めを請奉らむと云。ま。小。取。り。む。を。

ま。小。取。り。む。を。

ま。小。取。り。む。を。

不考證字ありべく、まゝと悉ヒカから非説ヒカ然るハ本考小引給へ  
る。岳瀆名山記の文小。扶蘇山在東海中。日之所出とある山  
也。富士山は侍らしり。其えまづ扶蘇フシヤクと富士フジとの音近  
く。殊ツト小此山小坐以木花之佐久夜毘賣命の亦名を。櫻大刀  
自神とも申し。伊勢の御鎮座傳記ある古傳小。櫻大刀自  
神二座ミタマハナノキニミ聖華木坐也。大八洲櫻樹始。後天上降居也。因以為華  
開姫命也。一座、大山祇神雙坐也と見え。まゝ別小。大山祇神  
一座。与櫻神並座也アサキと見え。伊勢小其御社ありて。朝熊  
社と白江を富士山フジも。淺間神社と櫻神の宮あり。此ら  
とも總て師の古史徵シヤクまゝ古史傳シヤクか。蘇シヤクと佐久良サクラと音の相  
小証しあり。小依りて申し侍り。蘇シヤクと佐久良サクラと音の相

迹交を思ふヒキクボクまゝ木キやがて櫻木シヤクも侍らしり。佐久良と佐  
ひて可語ある由ん故鈴屋翁の既小宣シヤク了シヤク如く侍り。彼  
彼国小其良夜と有き語の初と濁りて。シヤクと唱へ未  
ぬるも其、国風クニノカミのし。此考シヤク當りある。名山記小謂シヤクある。扶  
蘇山フソもかち富士山フジあるへきこと。語ひ有シヤクまゝくシヤク覺シヤクえ侍  
りか不申さ。バ佐久夜毘賣命も。大山祇神の御子ミコ坐し。そ  
の大山祇神も。有シヤクりる山神の本シヤクつ神シヤク也。天上小御坐し。此  
神の御霊の因りて櫻木シヤクも生シヤクり。佐久夜毘賣命シヤクやがて其精  
靈の神シヤクある也。天皇祖神シヤクとの御計シヤク也。天降しシヤクあるこ  
と。師説の如くシヤクかれ也。此師説も。古史シヤク第百四十七段シヤク第百四  
十九段の傳シヤクも委シヤクく注シヤクせられり。其降しシヤクあるシヤク如く富士の地シヤクも。神世小榮シヤクえて在りし不

とは。漢土より見ゆる許の<sup>モロシ</sup>大樹かりしが。後子然るべき由<sup>モ</sup>  
ありて、<sup>クニニツク</sup>国鎮の山と化れむ。是を以て万葉集<sup>ツク</sup>天地の分も  
し時、<sup>カムサビ</sup>神佐備<sup>クハ</sup>。高く貴を駿河かゝる。布士<sup>フシ</sup>の高嶺といふ由  
と<sup>イハレ</sup>言ひも得<sup>イハレ</sup>。名けも知らぬ。靈くも座以<sup>イハレ</sup>神りも云<sup>モ</sup>。日本  
の山迹<sup>イハレ</sup>国の鎮とも座以<sup>イハレ</sup>神りも坐とも成れる山りも。かど  
詠侍<sup>イハレ</sup>りむ。一夜<sup>イハレ</sup>小湖いで来て。駿河<sup>イハレ</sup>国は富士山成れり。と  
いふ傳<sup>イハレ</sup>子も。し信<sup>イハレ</sup>からり然る大樹の立ちがら巖と化れる  
故<sup>イハレ</sup>小是<sup>イハレ</sup>ま。神の御慮<sup>イハレ</sup>して外<sup>イハレ</sup>辺の士<sup>イハレ</sup>近江<sup>イハレ</sup>子取<sup>イハレ</sup>りて甲<sup>イハレ</sup>ひ  
成<sup>イハレ</sup>とまへる物と知<sup>イハレ</sup>へし。世を創<sup>イハレ</sup>りぬへる神の御所<sup>イハレ</sup>為<sup>イハレ</sup>な彼<sup>イハレ</sup>  
れ<sup>イハレ</sup>バ<sup>イハレ</sup>人<sup>イハレ</sup>のいと少<sup>イハレ</sup>き智<sup>イハレ</sup>もて測<sup>イハレ</sup>り知るべき。除<sup>イハレ</sup>小<sup>イハレ</sup>あらは彼<sup>イハレ</sup>  
国籍<sup>イハレ</sup>子。木<sup>イハレ</sup>の状と云<sup>イハレ</sup>。諸<sup>イハレ</sup>説の伴<sup>イハレ</sup>からぬも。佐久良<sup>イハレ</sup>と固<sup>イハレ</sup>よ  
り。彼<sup>イハレ</sup>国<sup>イハレ</sup>小<sup>イハレ</sup>なき木なる故<sup>イハレ</sup>や侍<sup>イハレ</sup>らむ。和名抄<sup>イハレ</sup>。櫻<sup>イハレ</sup>字<sup>イハレ</sup>を佐<sup>イハレ</sup>久<sup>イハレ</sup>

良<sup>イハレ</sup>と訓<sup>イハレ</sup>されむ。此<sup>イハレ</sup>は櫻<sup>イハレ</sup>桃<sup>イハレ</sup>と云<sup>イハレ</sup>ひて。宮崎<sup>イハレ</sup>。安貞<sup>イハレ</sup>が農業全<sup>イハレ</sup>云<sup>イハレ</sup>。  
由<sup>イハレ</sup>須<sup>イハレ</sup>良<sup>イハレ</sup>と訓<sup>イハレ</sup>わる物<sup>イハレ</sup>をれむ。佐久良<sup>イハレ</sup>の正<sup>イハレ</sup>字<sup>イハレ</sup>は叶<sup>イハレ</sup>む。松岡<sup>イハレ</sup>云<sup>イハレ</sup>。  
達<sup>イハレ</sup>が櫻<sup>イハレ</sup>品<sup>イハレ</sup>子。垂<sup>イハレ</sup>枝<sup>イハレ</sup>海棠<sup>イハレ</sup>と云<sup>イハレ</sup>れるも未<sup>イハレ</sup>し。世<sup>イハレ</sup>の詩<sup>イハレ</sup>文人<sup>イハレ</sup>ら。其<sup>イハレ</sup>  
詳<sup>イハレ</sup>れらぬ小<sup>イハレ</sup>苦<sup>イハレ</sup>多<sup>イハレ</sup>る。然<sup>イハレ</sup>るに<sup>イハレ</sup>か<sup>イハレ</sup>ら。実<sup>イハレ</sup>小<sup>イハレ</sup>り。又<sup>イハレ</sup>字<sup>イハレ</sup>を佐<sup>イハレ</sup>久<sup>イハレ</sup>良<sup>イハレ</sup>  
小<sup>イハレ</sup>用<sup>イハレ</sup>ふべきと覚<sup>イハレ</sup>え侍<sup>イハレ</sup>り。と云<sup>イハレ</sup>ひ遺<sup>イハレ</sup>せし。篤<sup>イハレ</sup>胤<sup>イハレ</sup>今<sup>イハレ</sup>この説<sup>イハレ</sup>  
字<sup>イハレ</sup>攷<sup>イハレ</sup>ぬ。此<sup>イハレ</sup>は信<sup>イハレ</sup>子<sup>イハレ</sup>然<sup>イハレ</sup>るべし。其<sup>イハレ</sup>はまづ和名抄<sup>イハレ</sup>。文字集<sup>イハレ</sup>  
略<sup>イハレ</sup>云<sup>イハレ</sup>。櫻<sup>イハレ</sup>合<sup>イハレ</sup>桃<sup>イハレ</sup>。曰<sup>イハレ</sup>櫻<sup>イハレ</sup>桃<sup>イハレ</sup>子<sup>イハレ</sup>。大<sup>イハレ</sup>如<sup>イハレ</sup>柏<sup>イハレ</sup>。端<sup>イハレ</sup>有<sup>イハレ</sup>。赤<sup>イハレ</sup>白<sup>イハレ</sup>黒<sup>イハレ</sup>者<sup>イハレ</sup>也。和名佐<sup>イハレ</sup>久<sup>イハレ</sup>良<sup>イハレ</sup>  
と有<sup>イハレ</sup>れど。櫻<sup>イハレ</sup>を本<sup>イハレ</sup>邦<sup>イハレ</sup>の佐<sup>イハレ</sup>久<sup>イハレ</sup>良<sup>イハレ</sup>子<sup>イハレ</sup>非<sup>イハレ</sup>ざること。実<sup>イハレ</sup>小<sup>イハレ</sup>も先<sup>イハレ</sup>輩<sup>イハレ</sup>に  
て小<sup>イハレ</sup>之<sup>イハレ</sup>と弁<sup>イハレ</sup>じし。選<sup>イハレ</sup>沈<sup>イハレ</sup>休<sup>イハレ</sup>文<sup>イハレ</sup>。早<sup>イハレ</sup>登<sup>イハレ</sup>定<sup>イハレ</sup>山<sup>イハレ</sup>。侍<sup>イハレ</sup>子<sup>イハレ</sup>。山<sup>イハレ</sup>櫻<sup>イハレ</sup>登<sup>イハレ</sup>欲<sup>イハレ</sup>然<sup>イハレ</sup>。  
注<sup>イハレ</sup>果<sup>イハレ</sup>木<sup>イハレ</sup>。名<sup>イハレ</sup>花<sup>イハレ</sup>。朱<sup>イハレ</sup>色<sup>イハレ</sup>如<sup>イハレ</sup>火<sup>イハレ</sup>。欲<sup>イハレ</sup>然<sup>イハレ</sup>也。と有<sup>イハレ</sup>り。彼<sup>イハレ</sup>小<sup>イハレ</sup>櫻<sup>イハレ</sup>と云<sup>イハレ</sup>は朱<sup>イハレ</sup>花<sup>イハレ</sup>な  
り。此<sup>イハレ</sup>方<sup>イハレ</sup>の櫻<sup>イハレ</sup>と云<sup>イハレ</sup>物<sup>イハレ</sup>を。彼<sup>イハレ</sup>士<sup>イハレ</sup>子<sup>イハレ</sup>なるよし。延<sup>イハレ</sup>宝<sup>イハレ</sup>羊<sup>イハレ</sup>中<sup>イハレ</sup>。長<sup>イハレ</sup>崎<sup>イハレ</sup>小<sup>イハレ</sup>來<sup>イハレ</sup>

りし何清甫云へり。若有りは彼士の出子記し。待文中も述  
作し賞詠をへき。此樹かき故小也。そのしといひ朱舜水  
終綺ふ。此人の墓。水府君の櫻字多く植ゆり。あへるを  
いひて。文恭親愛櫻。嘗謂。覺曰。若使中国有。此花。當冠。百花也。  
と云ふよし見えり。文恭の舜水の溢覺とて。安積覺と  
て。舜水の舜子ぬりし人ぬり。諸和名抄子當り。櫻桃も也  
そら梅なるも。大和本草子見えて。異名多き物なり。本草  
啓蒙と見て知るべし。おほく和名抄小。本草云。櫻桃一名朱櫻  
和名波。加一名加。逆波。佐久良と有るも違へり。然れど甚  
久しく佐久良の字とせ。ゆて若木と扶表と同木ぬること。既小  
むも難なくこそ。ゆて若木と扶表と同木ぬること。既小  
辨ふる如かる。彼国藉小。其形状を云ふこと。彼此違ひて。同  
ひるも。実小も其国小。每き物字記せる故なり。その上子引  
さる大荒東経には。大荒之中。有山名曰。孽搖。上有扶木。柱三  
百里。其葉如芥。有谷曰。温源谷。と記し。十州記子有。椹樹。長者

数千丈。太二千余圍。兩同根偶生。更相依倚。是以名。扶木。其  
樹雖大。其葉及椹。如中夏之桑也。椹希而色赤。九千歳一生。実  
耳味絶耳。香養云々と有りて。共子華の事云はも。されど  
其華の状も。若木と傳へたる説等子て知らる。その楚辞天  
問も。羲和之味揚。若華何光。注子羲和日御也。言日未揚出之  
時。若木何能有明赤之光華乎。と呂氏春秋小。華之美者。若  
木之華。れども云ふり。凡扶表の形状を云ふこと。十州記はり  
最惜きと。ひる子楚辞と呂氏春秋と。小かく傳へし。信ら  
り。淮南子の高誘注子華の状と。如蓮華と云ふこと。信ら  
れ。此後子或儒者の文化八年子。對馬国子行。る。記  
セ。薄遊漫載といふ物字見れ。八月十三日。登。稜。早。踰  
蝦尾嶺。經。樟川。小。江。渡。岸。古。樟。數。百。年。物。藟。蔭。蒲。然。踰。日。觀。嶺  
土人相傳者有。巨椹樹。繫。方。六。里。溪。谷。常。若。夜。最。曜。夕。暎。唯。櫻

為見故曰日觀事雖似使亦奇蹟也。以て李時珍が本草綱  
云、る下有り。由有れ存る下れり。以て李時珍が本草綱  
目小。朱槿の異名と扶桑といふ義と釈して。東海日出処  
有扶桑樹。此花光艷照日其葉似桑因以此之と有り。文の意  
え。朱槿は扶桑といふ名を負するも。東方日出処なる扶桑  
樹を其花光艷。日子照て其葉は桑に似たりと。然るに此  
朱槿の花葉。まゝ其子類とす小因て。比して扶桑といふ  
と云る義れり。朱槿と云ふ木のこゝ南方草木状小始めて  
紅黄白の三色有り。俗にこれを扶桑といふ。此は上の  
いふ小并七条子と既し論る字合せ考ふべし。此は上の  
楚辭。呂氏春秋と。若木の華と称せると能符へるも。時  
珍内さ。古説の養る所ありて。山海經れに。若木扶桑

同樹とは云され。實も同樹なる由字知りて。記せる説と  
聞ゆるが。佐久良の華に咲光艷する趣小よく叶へり。師の  
記傳小。木花之佐久良夜晝賣命の御名の美を解きて佐久良  
と開光映の伎波と切りて如なる字通を以て久と云るあり  
光映を波夜といふも下照比賣の哥も阿那陀麻波夜と  
る波夜の如し。斯て万の木花の中は櫻を勝れて美き故に  
殊に開光映てふ名を負て佐久良といふ。夜と良といふ  
横に通ふ音あり。小兒のいふ舌のなぐも回らぬ不どの  
言あり。ウリルレ口と。ヤイエヨといひて櫻をも佐久良  
と云ふ。是自つかり通ふ音れきえれり。と云れは後と思ひ  
合されて。以て其葉と芥の如しと云ふは。稍遠なれと。  
吾小似たりと云ふも。其状いと迫し。但し吾小救獲ありて。  
本草子も女名。横義。繁義。山名。白名。雞名。子名。金名。分といふ  
名ども有るが中。山名といふ物子や。葉子股れく。其先尖

りて長か。葉小光沢ありて。櫻葉小いよく似たりも有  
る。時珍が言ふ。白蒸菜大如掌而厚と云ふ。信小なる一  
種も有り。又葉如芥といふ説も此菜を以て此へするも  
べし。有るかくて其木と椹樹といひ。其実を椹とレいふ云々も  
上文小葉皆如椹といひ。扶菴と云ふ小引レきて出来し文と  
聞えたり。その前も云々如く。椹も菴の俗字なり。菴は  
毛詩衛風よ。菴之味落。其葉沃若。干嗟鳩兮。各食其菴云々  
有りて。菴子よレさる字れり。字葉こそ似され。菴をりぬ樹  
み。いりて真の菴生らぬ也。是子て其子と椹と云ふも。唯文  
の上のされること灼然なり。然るも椹樹と有れぬ。さる菴  
されども是も其の菴椹の樹なり。下文子如中夏  
之菴也といふ云々レ或ハ不異於中夏之菴といふ。曰。於中夏

之菴と云へき物なり。こは彼所の菴椹の木に似て有  
れども。掃子異木なるが故に如字と下し更其名。扶菴とい  
ふ。但し此文は椹樹と稱し扶菴と有るを。強ひて然云  
ふとも。既引くる諸書に。扶菴を即若木なりと謂ひ。其  
謂ゆる若木の華を右の如く稱せるは。菴は然る花の絶  
て有ること。各れに何の証ひも欲するとも。強ひ課法レまし  
こも。然れば右の文も。実の形状小拘はり。又菴木の子の生  
れる初めの青うるが赤くなり。其赤色極りて黒く熟レる  
が。菴の実もさ々熟るる故に。比とりて所思也。されどもこ  
其実の味ひも。絶耳香美とい言可れ。これ菴とい太く異れ  
る所なり。然るに櫻子を信レふ甘美にして。香氣あれども。菴子  
其落葉と干して。菴末と為し。薫物と有るは。いりて大荒東経  
最も美き香氣ある物なり。菴葉は然らぬ。いりて大荒東経  
の文も。扶木桂三百里といひ。十州記も。日根偶生更相依倚。



是以名扶ツク。有るを按ふる。櫻樹も。多く葉芽ヒコバユを生じて  
殖シヅメゆく物なり。親木も子木も。曰く状サマシ小扶疏シヅメもるが柱ヒコバユの立タチ  
立タチとる趣シヅメ似ニとれ。扶木柱ツクといひ。同根偶生。更相依倚ツク  
は語り傳ツクり。前マ子全文と。本文とせる所の廣ワカ注ツクは。謂ツクや  
故の名分るをも思ひ合ツクをべし。扶木柱ツクと。まは説文ツクの。又ツクと  
所ツクる郭注ツクは。柱ツク猶ツク起ツク高ツク也ツクと云ツク。るも非ツクなり。  
象形ツクと云ツクひ。通釈ツク小後ツク。三ツク又ツク。象ツク之ツク婀娜ツク也ツク。爾雅注ツク曰ツク。婀娜垂  
條也ツクと云ツク。る小依ツクれ。老樹ツクなる故ツク。條ツクを垂ツクとツクし。或ツクも  
謂ツクつる垂櫻ツクなり。心ツクも知ツクべし。然ツクら。但ツクし通釈ツクは。十州ツク記ツクの  
條ツクのツクと為ツクとる説ツク。まは十州ツク記ツクは。仙人食ツク其ツク椹ツク而ツク一體ツク皆ツク作ツク  
と非ツクかれは取りも。まは十州ツク記ツクは。仙人食ツク其ツク椹ツク而ツク一體ツク皆ツク作ツク  
金光色ツク飛翔ツク玄虚ツクと見え。若木圖ツク贊ツク小食ツク之ツク靈智ツク。為ツク刀ツク為ツク仁ツクと

有るは。僂菜ツクとる由ツクなり。突然ツクも有ツクり。か下ツクと。今在ツクるツク櫻ツクと  
りし。其实ツク及ツクひ其ツク木皮ツクの。能ツクく邪熱ツクと解ツクし鬱氣ツクと散ツクし。飲食  
を消化ツクし。痰喘ツクと止ツクめ。瘡毒ツクと治ツクらるツク。功有ツクれ。常ツクは長服  
せむ。僂菜ツクとらむも何ツクも疑ツクむ。況ツクて謂ツクつるツク木ツク也ツク。天上  
より降ツクし。多ツクる祖樹ツクれ。れツク更ツクれり。されツク此ツク木ツクは。諸蕃ツク國  
目の医ツク者ツクと。小ツク艾ツク。論ツクは。於ツクて每ツク支ツク下ツクをツクれ。今ツクは皇國ツクの医  
者ツク類ツクは。民間ツク小傳ツクとる禁方ツクと。も用ツクひ。る趣ツクは。よりて  
其ツク功能ツクを記ツクし。けて日記ツクは。九千歳ツク而ツク一ツク生ツク。実ツクと云ツク。るも荒磨ツク小  
似ツクとれ。此ツク樹ツクは降ツクし。多ツクる。天地初ツクめ。て立ツクとる伊邪那  
岐神ツクの御世ツク始ツクれり。しと視ツクれ。を異ツクむ。小足ツクら。を總ツクとて老樹  
を実ツク生ツクり遠ツクき物ツクなる。よ況ツクや然ツクる靈異ツクの祖木ツクかれ。む。さも





東山經ハ也。空桑之山といふあり。淮南子の註ハも魯地名とあり。此等の從と執りて伊尹が生れしと彼ハ此ハはむと。漢地内ハ就きて云。淮南子本經訓ハ。舜之時。共工振滔洪水。以薄ハ空桑ハ。有るも。其洪水の滔りて。万国の頂上ハ。高き扶桑国ハ也。殆薄ハ及ハはハ。扶桑の青ハ。采ハ蕃茂り。心ハ格ハ。空桑之蒼ハ。有るも。扶桑の青ハ。采ハ蕃茂り。限ハ知られを遠ハる由ハれる故ハ也。其ハ。淮南子倣真訓ハ。以ハ。鳴濛ハ。為ハ。景柱ハ。而浮揚ハ。於ハ。岳ハ。吟ハ。崖ハ。之ハ。際ハ。注ハ。子。鳴濛ハ。東方ハ。之ハ。野ハ。田ハ。所ハ。出ハ。者ハ。故ハ。以ハ。為ハ。景柱ハ。道ハ。忘ハ。訓ハ。子。東。岡ハ。鳴濛ハ。之ハ。先ハ。是ハ。かハ。り。抑ハ。扶桑神州ハ。は。天照日大御神の本ハ。つ御国ハ。は。万国の御国ハ。なれむ。其。大道の本原ハ。也。鳴濛ハ。遠ハ。く。限ハ。知られぬ字。我ハ。師の大人ハ。の。直ハ。く。も。高ハ。き。本考の出ハ。て。弥ハ。廣ハ。は。

弥ハ。高ハ。き。采ハ。え。行ハ。く。と。脱ハ。び。思ハ。ふ。餘ハ。り。此ハ。神木ハ。の下ハ。枝ハ。と。成ハ。な。ひハ。つ。此ハ。稿ハ。字ハ。記ハ。し。侍ハ。り。て。云ハ。ひ。遺ハ。せハ。り。か。不ハ。種ハ。て。いハ。ひ。遺。早ハ。く。思ハ。ひ。得ハ。て。も。有ハ。り。と。此ハ。虫ハ。より。き。載ハ。さ。る。も。多ハ。く。ま。道ハ。捕ハ。始ハ。り。て。能ハ。く。も。思ハ。ひ。ゆハ。し。と。覺ハ。わ。る。も。多ハ。き。子。非ハ。も。或。心ハ。穿ハ。鑿ハ。は。過ハ。て。却ハ。り。て。非ハ。なる。も。多ハ。り。り。を。も。取ハ。捨ハ。し。て。其。取ハ。へ。き。下ハ。さ。も。ん。外ハ。の。虫ハ。も。用ハ。わ。る。知ハ。る。も。ん。記ハ。も。ま。心ハ。定ハ。り。し。つ。今ハ。も。此ハ。虫ハ。より。き。漏ハ。れ。ま。し。き。此ハ。一ハ。條ハ。の。も。出ハ。せ。る。な。り。国ハ。秀ハ。こハ。の。説ハ。は。左ハ。袒ハ。て。空ハ。桑ハ。の。考ハ。へ。能ハ。く。も。索ハ。隱ハ。せ。ら。れ。り。然ハ。る。も。此ハ。啓ハ。筮ハ。は。大荒南經の注ハ。に。引ハ。く。る。文ハ。れ。る。が。其ハ。前ハ。後ハ。も。教言の證ハ。と。る。も。べき文ハ。あり。そ。も。美和ハ。蓋ハ。天地始ハ。生ハ。主ハ。日月者ハ。也。故ハ。啓ハ。筮ハ。曰ハ。空桑之蒼ハ。八極之既張ハ。乃ハ。有ハ。夫ハ。美和ハ。是ハ。主ハ。日月職ハ。出入ハ。以ハ。為ハ。晦明ハ。と。いハ。ひ。石ハ。と。同ハ。虫ハ。と。引ハ。き。し。有ハ。夫ハ。美和ハ。之ハ。子ハ。出ハ。于ハ。陽谷ハ。故ハ。堯。

因此而立。美和之宮。以主四時。云々。有り然れ。美和は皇  
國の神人かりし。こと論ひ毎く。空をやがて扶されること。  
淮南子本經訓の文。相發して弥々明なり。然れ。列子小  
伊尹。生于空桑。と有り。皇國子生れし。こと疑ひをし。旧説  
小漢土内なる由云るも。空をやがて皇國なる事。知され  
はかり。然る。漢土。空桑。てふ地名。ゆる。真の空桑。とる  
岳れ。の類。と。同。り。さ。て。細水。を。洛水。の。辺。に。在。り。漢土内  
かる。こと。言。ふ。も。更。なる。伊尹。の。彼。國。子。生。れ。る。時。に。其。母  
を。も。將。て。行。き。て。其。母。後。に。伊水  
の上。子。居。さ。り。と。為。む。小。姑。す。し。偕。ま。し。因。子。思。ひ。た。る。説  
有り。其。を。莊子。逍遙遊。の。鵬。之。後。於。南。冥。也。水。擊。三。千。里。搏。扶  
搖。而。上。者。九。万。里。と。有り。扶搖。も。即。扶。疑。と。聞。之。侍。り。然。る。小

此。凡。の。別。名。也。と。云。る。説。の。有。る。も。下。文。子。凡。之。積。也。不。厚。  
則。其。負。大。翼。也。每。力。故。九。万。里。則。凡。斯。在。下。矣。と。云。る。小。依。り  
思。ひ。紛。り。し。説。を。り。と。有。る。下。文。子。搏。扶。搖。羊。角。而。上。者。九。万。里  
と。有。れ。ど。羊。角。而。も。如。羊。角。而。と。云。る。如。字。者。在。る。も。其。説  
屈。折。し。て。上。る。状。の。羊。角。小。似。し。る。れ。り。か。し。る。所。に。如。字。と  
省。れ。る。例。古。文。子。扶。搖。や。が。て。搏。疑。を。る。由。も。外。篇。在。者。子。雲  
將。東。遊。過。扶。搖。之。枝。而。適。遭。鳴。蒙。と。有。り。扶。搖。之。枝。と。し。し。云。  
る。も。樹。小。非。り。不。何。々。有。ら。む。よ。し。逍。遙。遊。の。搏。扶。搖。而。上。者  
九。万。里。と。云。る。小。依。り。思。ふ。も。其。扶。搖。字。拊。と。し。て。其。字。搏。り  
て。九。万。里。の。高。文。子。上。れ。る。な。れ。ど。極。り。て。大。樹。を。る。由。れ。る  
が。在。者。の。文。子。雲。將。東。遊。過。扶。搖。之。枝。と。有。る。小。合。せ。攷。ふ。る

子。東方の大樹と聞えとると。東方小名高き大樹と。搏を  
殊小名高けれと。疑なく搏の別名をらむ。然るは扶搖の  
扶も。元より扶の扶をる字搖とは。謂ゆる冷陰小聲ゆる  
ほり也。立昇れる木をれを常小凡烈くして其枝葉の動搖  
しりむ故に扶搖といふ名を負ひ侍りけ也。まよ此子就て  
按子道捕ぬ  
しの云る如く。鴻蒙とん。皇国を云へる子倫ひるまきとん  
の在者。雲將東遊云て。適遭鴻蒙と云へる雲將鴻蒙とも  
小例の寓言れるが。皇国を漢士の東方に在りて殊に遠  
く速く鴻大蒙冥子して何れを許し知難れれを仰て鴻  
蒙とは云るならむ。其鴻蒙の国小く。適遭子る神  
也。子れむ其名とも。鴻蒙と寓言せる物なるべし。師の御訣  
と請ふと記せる也。川崎童恭見て。道捕ぬし。空をやがて扶  
姦の事と為られしと。国秀ぬし左祖せらるれとも。童恭は

甘心し侍ら也。其も空姦とも蒼天の姦より爾雅。秋天子。穹  
蒼。天也。有る郭注。天形穹窿其色蒼とあり。穹蒼小  
同く。空も若紅。切音孔。穹は去弓切音。穹れま共子東次清  
韻小て。何れも大虚の義をるると論字侯。空姦の姦は。  
蘇即。切韻平声をるよ。蒼倉と通し。蒼は千剛切音倉倉も千  
剛切音倉ま。蘇即切音  
姦ははら。荘子の庚桑子と元倉子とも作するも曰し。姦小  
て。空姦之蒼とん。大虚空の蒼とん。一高き也云るなり  
是を以て其下文。八極之既張と相對して文と成せり。此  
と釈もれむ。大虚の蒼みことり。四方八極も調ひとるよ。姦  
和ありて。日月を主ると云る姦の字。字道捕ぬし。蒼と  
の字。字の扶は神樹

の蕃茂蒼々しむるを云ふ語と為られしは何ぞや。彼神樹実  
小高く繁榮えて外<sup>ツ</sup>国よりは空とも思ふはかり見ゆとも  
東方子見ゆべき。寧て々東方の之を上より南西北  
方八極とも云ふ。大虚空の美と見れむ。サリも難るし  
て共工氏<sup>キコウ</sup>が洪水を滔<sup>トウ</sup>しむるも。空乃<sup>ノ</sup>大虚空も薄るは  
つと也くと見て在るへし。然ると二人の主<sup>ミ</sup>とち。空乃<sup>ノ</sup>やが  
て扶桑国なりとて。彼国の空乃といふ地名なり。此方の名  
と偷りる称とし。伊予も皇国の産れりと云れし。他より  
見え附會の説とや云む。山海經淮南子の注を始め諸云み。  
空乃山名。伊予生処在冀北<sup>キホク</sup>といひし。まよ<sup>マヨ</sup>窮乃と云ふも有<sup>ル</sup>  
る。魯北<sup>ロホク</sup>なる。左傳の杜預<sup>トコ</sup>が注す。窮乃<sup>キウノ</sup>少皞<sup>セウカウ</sup>之号也と云へる  
と見れし。往昔少皞氏<sup>セウカウ</sup>の徳と天小比<sup>テンコヒ</sup>して。大虚空の美字

取りて。窮乃とも号しけむ。後世その居所なり。やがて空乃  
とも窮乃とも称れむ。伊予も其地<sup>ウレシ</sup>小生有しれるべし。但  
空乃とも窮乃ともいひひる其地の詳ならぬ。そは伏羲氏  
も漢土子例多る。そよて計ふる暇あらぬ。そは伏羲氏  
本帝氏の世頃こそ。彼国も草莽の時なれも。吾<sup>ボク</sup>皇神<sup>スラカミ</sup>より  
天降坐して。国とも造り人とも教へむ。伊予が<sup>ウレ</sup>生<sup>マ</sup>  
出れむ頃も段世かれも然る賢人の出れむこと。堯舜の時  
より然<sup>シカ</sup>有りしを以て知べし。国秀<sup>クニヒメ</sup>主の伊予が漢土へ渡り  
見む子妨<sup>シラ</sup>りしと説れむ。且<sup>ナ</sup>かく云して行は。彼国に在りて在  
りて賢者とも。皆皇国より渡れる者としてむ。師大人の深<sup>フカ</sup>  
く遠く考ふるひし。扶桑太帝<sup>フサウ</sup>太一少子<sup>タイ</sup>かとの後。世の初

癸のチトセ下チトセこも有れ其後いく千歳を經チトセれむ世まで皇國  
より賢人渡り行つた。彼國の賢人れしは説賜を授る  
者とや。漢土も更なり。その西戎の國しも。その國造りし初  
の國人の賢きしや。未しこし。靈幸と賦り分帯し。あま後世  
各國の古傳を以てし。知てし。但し。鳴蒙も。二人の主の説実  
み然るべし。ま。國秀ぬし。扶搖字扶茲なりとの考へ。殊  
珍コト云く羨もれむ。仍も其證を加侍らむ。彼在宥篇の過  
扶搖之枝とある。李民が注す。扶搖神木也。生東海。一曰風也  
と云り。神木といひ生東海と云へる。扶桑を除きて何ら有  
らむ。然るも道遙遊する。搏扶搖而上者九万里と云る所は。  
揺之枝とわりて凡といひ難。故小古説を以て神木也  
と注せり。然れと寓言や。さる故小ま。一曰凡也とい

云る。凡て。莊子と注する。寓言とて注せるが。多文中  
も扶搖と神木也と注せる。古傳あること疑ありと。記  
し。右三人も。齡も同じ程れる若者ともして。共トモ子我が  
塾中子ツクナ学びし倫れるが。何れも和魂漢文ツクナし。拙りらむ。  
恒ウルハといと愛しき間かれと。學向の道小も。如此れも切瑳琢  
磨ツクナするも。甚嬉しとは視る物うら。其當否を問ふ子定めら  
む。彼もを負ミテそ。此もれ負ミテそ。云より外子辭なくして在レけ  
る。餘のヲシヘテ弟子ともい。如何と問ふ子黙止トモあり。今其是非  
定めむ。道捕が啓莖の文子眼と終けて。空桑之蒼と  
有る也。即扶茲チトセなりと視する。実子卓見トモなり。但し。空桑と  
いふ空の義



を釈きて老樹れをば其木の中心の空虚なる故に空虚を  
と呼びと云ふを違へり其由を下よりいふを見て知べし。斯  
て道捕伊尹が生れし空虚と乃皇国と為るも重葦が論  
へる如く非れま。鳴濠の説これ亦卓見れり但し此字扶  
桑の栄之茂りて遠なる美小取れるは違へり。国考の初條  
其此語初めて出たり。伊尹その道捕が見落せる。啓筮  
の前後の文小目をつけて。美和を皇国の神人と視るる  
卓見れま。伊尹も皇国の産と為るる。道捕と連坐な  
り。然る小莊子なる扶搖と。ヤゲて扶云れらむと謂へる説  
を卓見れり。殊より重葦が加證も有りて。伊尹扶搖の名美和  
説きて。扶と扶云の扶と云るも然るべし。扶字の手子

从ふ。諸出同一れま。此は扶字れること。既子云るが如  
し。斯て搖字ま。木子レツカ从ふ字なり。そは説文木部。招樹搖  
兒。从木召声。段注。搖各本作搖。今正招之言。招也。樹高大則如  
中動之兒。按此。搖樹動也。从木召声。有る注。搖之言搖也。  
招搖手招搖同。今俗語。謂煽惑人為招搖。當用此。後木二字。謂能招致而搖動  
也。といひ。西山經。槐江之山。其陰多搖木。と有る。郭法。晉語  
小。搖木不生。卷の韋昭注。も小。搖木。大木也。と云り。然れを  
何樹子。田是。嵩大なるを搖と謂ふれり。是を以て東方の扶  
桑大樹也。よ。扶搖とも稱するなり。部小別。小。搖字ありて。  
昆命何隅之長木也。と有る。伊尹説文手。部小。扶在也。从手夫  
手。搖の木。字と尙えり。伊尹説文手。部小。扶在也。从手夫

聲段注左俗木改作佐招手評也从手召聲呼者外息也呼今正  
召也不以口而以手是手評也孰有若葉傳曰招招号召之搖  
息按訖去召者評也号者聲也是用手用口通得云招也  
動也从手召聲と有り然れ夫召召子固より扶招搖の美  
あると人の用子は手子从ひ木の用子は木子後予り此差  
別字常思ふべし其此三字のみは非文然然彼国子  
煩はしく文字を作りつゝも其用ひたる類いと漫れるこ  
と扶召と去へきと上子引とる教十部の去子を扶召との  
み作り過小技揺ともいひ一名の傳えれる莊子子は子扶召の  
揺と去子故小凡別名也云云云愚注さへ子出来しか扶  
り凡て彼国籍の保解多く子載その聚訟の止さること職  
と一て此等の子諸国の音声の一定せさること子固るこ  
るこが然れ子夏殷以前を簡易かりれると周代よりこ  
て字も多く成まさり音美まと甚頃はしくそは子りる況  
て後世子字母及切りのこの出来てより子の蓋え母子も  
非されこも又却りて古の音美字失へる害とも甚多り

此を深く致子る説等所れを以て扶搖の説小就て按ふ  
叙ありむ時も論ひも出なむこ以て扶搖の説小就て按ふ  
小彼大荒東經小有山名曰孽搖顛抵上有扶木挂三百里一  
有る孽搖し乃扶桑の別名と聞えとりそを説文子孽廢子  
也从子孽声と見え其段注小凡木萌旁出皆曰孽人之支子  
曰孽其美略同古通用何注公羊曰庶孽衆賤子猶樹之有孽  
生得其美矣と有るとまつ思ふべし作孽通論曰妾親之子  
曰孽之音孽也有罪之女没廢役之而已得幸於君有所生  
若木既伐而生稊改於女子孽為孽孽者孽也と見えまと孽  
木餘也廣韻孽餘增韻斫木餘謂斬而復生魯  
語山不搖孽註以株生曰孽と見えとり以て揺と扶搖  
の揺と同く喬木の美かるをも思ひ合まべし孽揺やがて  
扶召の異名かること疑れく此樹の立采えし山れる故子

孽搖とも称し。孽生の立竝るとを以て。扶木柱三百里と称  
せる。小て。有谷曰温源谷と有る。既小云こく上池と聞  
也れ。富士山の頂上小。今も現小池の形して。凹める所あ  
る由れる。其上池の蹟をらひも知へり。史古く史記  
の扁鵲傳に。長谷君が扁鵲子菜と予ふる時の語に。飲是上  
上池水三十日。當知物矣と云。こ見え。本草出類。上  
池水。半天河也。と。空樹穴中水也。と。云へり。後子按も  
る。小国秀。上子引。道遙遊の文字。搏扶搖。羊角而上者  
九万里。と。訓。論。予。後。然。然。と。彼。大。荒。東。經。に  
孽搖。顧。瓶。と。有。と。思。ふ。子。前。子。顧。瓶。字。と。誤。写。の。こ。と。思。ひ  
ん。こ。う。誤。り。て。こ。ん。扶。搖。羊。角。と。も。孽。搖。顧。瓶。と。も。稱。せ。る。四  
字。の。山。名。も。る。も。知。へ。り。若。然。も。有。む。は。道。遙。遊。の。文  
は。搏。扶。搖。羊。角。而。上。者。九。万。里。と。流。こ。り。顧。瓶。羊。角。と。も。此  
山の當昔の形。字。以て。名。け。し。者。と。云。へ。き。斯。て。後。子。ま  
と。雲。笈。天。地。部。と。見。れ。を。空。訣。經。云。玄。階。与。扶。搖。臺。有。東。北。方  
突。地。名。為。玄。天。也。言。天。階。登。起。若。扶。搖。臺。羊。角。边。周。仍。登。入。三

清也。ま。上。下。扶。搖。上。下。天。関。非。是。別。天。羊  
角。而。上。と。も。見。え。り。由。有。り。る。と。り。り。乃。て。重。恭。が。論。小。  
空。桑。と。穹。蒼。と。音。同。り。れ。を。虚。空。の。義。と。か。し。蒼。と。相。通。も。る  
由。て。澄。は。る。小。庚。子。と。元。倉。子。と。も。有。る。子。引。き。彼。如。の。空  
と。い。ふ。地。名。も。少。昊。氏。の。徳。字。天。小。比。と。て。窮。貴。と。も。稱。せ  
る。字。後。小。地。名。と。為。る。物。と。決。断。せ。る。さ。ず。確。乎。と。云。て。拔  
へ。り。ら。ぬ。勢。ひ。有。の。も。余。を。以。て。之。を。視。る。子。よ。く。その。服  
手。は。刺。と。れ。と。未。その。腰。字。捕。へ。り。説。と。云。べ。し。さら。道。輔  
が。考。證。よ。く。届。き。し。う。い。ふ。其。説。い。と。鹿。く。因。秀。が。助。力  
も。有。れ。と。尚。此。分。小。て。他。人。子。示。さ。は。必。重。恭。が。説。を。元。當。る  
と。い。ふ。も。有。る。む。然。て。互。子。揖。讓。して。相。引。も。る。よ。り。外

かきとあり 但し此は日し字ひの兄弟とあり内この後論は  
かく考證足さるる事ともし有らむといふ詮ありとありは  
く他は示さるべき事と容易に勿著はしと恒成むるは  
此故し柳空桑の従ふ道捕り論勝る由る。まづ少昊氏  
皇国の域に生れし人なり。其は既引くる大荒東経に大  
聲少昊之國と有る大聲は。皇国なるをて論ひ毎ま。春秋  
命歴序に帝王世紀に。初、窮民は邑せるが。後、彼如  
の曲阜に移任せる故に。窮民は邑せるより見え。然し  
こ小空桑山とも窮民とも稱する所ありて少昊之墟也と  
云ふ。此方と空民ともいひし名と擬せる名なること例こ  
くは多。空民窮民を更なり。曰く空桑とも作する。空窮字  
も。一東韻小收めて同韻なる。其、美まゝと互小相通も

字等かりと記文に。窮極也从亢躬声穹窮也从亢弓邑空  
竅也从亢工声と見え。徐鍇が音釈に空と枯公切と有れと  
韻會小若貢切窮也とも有りて。三字同美れると知べし  
韻とは邑のひいさなり音とは別れり。窮と渠弓切キウ穹  
を去弓切キウ。空と若紅切クウ。小共其韻をうる故  
に共。東韻に收する小て美とは窮極也。以て韻會穹字の  
穹窮也空窮也と云ふなりといふあり。以て韻會穹字の  
所に廣韻云高也爾雅云大也春秋緯少昊邑于穹桑日五色  
互照呂覽伊尹生於穹字或作空今雲南懸名浪穹土音為  
浪空云とあり。春秋緯の説に少昊氏の本國扶菽神州字云  
知べし呂覽の説に彼地は擬せる地名なり。其地小伊尹然  
く生れし由なり其所を乃謂わ雲南懸と聞えたり。然  
れ小窮桑とハ。東極の極めて遠き域に在る由と以ていひ

穹桑とは其樹の窮りて高く穹隆よ及べき由を以て稱し  
空桑まゝ大空空は下立栄えし故の用字れるが三字互カカ子  
相通もる義も論字俟をを聞ゆゆる 桑くは三五本國考少  
捕が空桑やがて皇國れりと云る説の故実小叶へるに道  
自くらよ知れむ。その初學記に啓基云蚩尤出首羊水八脰  
八趾首登丸淳以伐學桑黃帝殺之于青丘と有る 乃て重菴  
羊水青丘を皇都の地名するとも思合もべし。乃て重菴  
その倫末に伏戲氏本帝氏の世頃こそ彼國も草菴の時を  
れむ。吾が皇神より天降坐して國守も造り人をも教へ賜  
ひれぬ。云々と謂へる論も能し己が意を得たる語なり。阿  
波  
礼この川崎氏の子は十まり三ッ四ッの頃より我が膝元子  
て教へ育てし者小てまつひは事成をべく思ひ頼こし若  
者子をり羊項己が勞をも何くれと助けつ、近く我々為  
小鳥かどしちふ物な出しと名残子て今も世になき人

かりしは今此、世のかり成竟る  
は現中見せよるにこそ悲しけれ。和泉、國上條、良村が  
詩より古今六帖よ、難波律小咲くやこの花冬こもり。今と  
春を咲やこの花と有る歌の意を古今集の序注よ大菴  
の御門の。難波律小て。皇子と聞えりる時。東宮と互子也  
つり。位子即給けて三年に成小れを王仁とりよ人の。誦  
り思ひて。奉りりる歌なり此、花も梅の花と云れりべしと  
あり。八雲御抄小此歌を奉てこれに仁徳天皇の位をや  
つり。つりと子辰卜て。難波宮子かはし坐ま。王仁つよそへ  
て詠りるをり早可有。踐祚と良村按るよ。此、歌子この花  
云るをりと記させあり。梅の花小非文。こは木花開耶姫と申を御名と  
本と云て。當昔木の花と云へて。櫻の花のとかりし故も其

花字千子とり持ちて捧んつゝ木花といふ此花といひ  
うけて詠める歌なり其燈を万葉集も大伴家持陳私拙懐  
歌とわる長歌の短歌も櫻花今佐可里奈里稚波乃海於之  
互流宮雨伎許之賣須奈倍と詠れしは大雀天皇そのりみ  
稚波宮に坐て久しく御位に即給えりしと王仁が木花  
の今と春へし咲艶へる小准子て早く踐祚まし坐むてと  
陳り白せる故事を合めし歌ねること伎許之賣須奈倍と  
云る詞小り知られまゝ此歌も櫻花今盛なりと詠れしと  
以て王仁の歌もこの花と有るは木花子此花といひ掛と  
る詞の工なるても知られ侍りいふ語字兼とりと覺ゆる

履中天皇紀三年十一月雨枝船を市磯池に泛べて遊  
宴し身所子時櫻花散花干御天皇異之詔曰此花也非  
時而來其何如之花矣と詔へる此花も万葉集も藤原朝  
臣廣嗣櫻花贈娘歌と云る小此花の一与の内子百種の  
言を隠れよる不ありは有る此花もまた小木花此  
花相兼とる詞あり此外子古く櫻なりてし故事も木花  
多し然る小古今集の序注も此花を梅の花と云れるべし  
と詠小も云さるも此注小依りて千とせよ近き今の世も  
て王仁の歌を梅小準へて詠める也と訛り傳へ侍る也や  
といひ遣せとる萬胤今攷ふるは是まゝ詔れる説あり但  
谷川上清の和刑乘も家持朝臣の歌を引きて王仁の哥  
のこの花を梅は非文櫻なりとて家持の哥も王仁の  
哥も心合きて詠める其も古事記も木花之佐久夜是賣  
也とはり合言りき其も古事記も木花之佐久夜是賣  
と云き神代紀も木花開耶姫と云れ二典共何所も木

花とのこ有ると。御鎮座傳記の古文子。華開姫と云々コノハナまじ  
華木とも有ると就て。前にも爾雅の萩竹子。木謂之華と有  
る小依りて。木花といふし。華字を用ひし子やと思へれど。  
後小熟思へは。華と云ふ乃謂ゆる扶蘇木。けくら花のトナ子か  
む有る。其こまつ説文木部。榑木也。榑住司馬。上林賦。字  
作華。師古曰華即今  
之榑皮照引者。莊子。華冠。亦  
謂榑皮為冠也。榑者俗字也。  
曰其皮裏松脂。榑也。後木部。苞  
字化。流若華。と見え華字の下に榮也。榑注。爾雅。萩竹。曰木謂  
之華。榑。謂之榮。榮而不實。者謂之英。折言。之也。引伸。為光華。華夏字。从艸。華聲也。戶氏切。俗作花。女  
北朝  
鄭氏曰。衆象華葉垂敷之形。象華葉也。隸作華。徐云。爾雅。木

謂之華。草謂之榮。此對文爾。散文則草亦名華。廣韻云。俗今通  
用花字。云々といひ。榑字とも出きて。徐榑字引くる。其説  
據字此下れる。既注と曰説有り。但し説文の榑字此説を引  
り又し説文榑字の所  
の既注と見て知べし。今此等の説と相照して攷ふる。榑  
と榑の木字あるが。榑と和名抄木具。玉篇云。榑木皮。名可  
以為炬者也。和名加波又云。加仁波。今櫻皮有之と有る物小  
て。今世も。加波けくら。犬さくら。白加波子と云ふ木あるが。  
神典も。謂ゆる波々迦や。て是あり。木立のたまて更なり  
るが。花まじ。櫻も曰く。いと小さく白し。見所。以て花を  
と。案。櫻も異なく。香味あり。其外皮を。皴と。如く。白く。冬  
枯の時。な。此樹の多く。立。る。山を見れば。満山。白く。見渡  
さる。故。白加波といふ。あり。其皮。雨中。の。娘。子。用ひて

焯ヒキ信濃甲斐ノ山ノ殊ト多ク木ノ草ノ喬木類ノ入リ  
燐ノ説トよク合ヘりヲ不古史ノ第五十二段ノ傳子注ス  
見ル。此ノ大櫻といフ。佐久良ノ類ヲかラ。甚ク  
劣レる物ヲ有ル故ノ名ヲ犬蓼犬躑躑躑犬山椒ヲいフ類ノ  
有リ。然レた擣字ハ華木子似てハ有レト。非ズる故ヲ以テ  
殊ト制セる字ト崗トり。そレ讀若華トいヒ。擣字ハ  
彼ノ字ハ小木と从ずテ。桑字ハ制セる如ク。固ニ有リ華木ノ有ル  
るハ別トいハ為ス。制レる字ト見ユる字ヲ以テ。かクは謂フる  
也。此由未ダ華擣字ハ日音有ルを以テも知ルへシ。れリ  
因ニ云ハ上子記セる已ラ度ヲ有ル自然生ノ櫻ト。天保  
二年ノ春ヨリ花ノ咲初ルハ見レルハ葉ト皮ト給フ。りト  
れル加邊依久良ハ有ル。此日江戸子ト絶テ見ル。二  
と有樹有るハ何子一ト生出。らハ實ハ鳥ノ所為るリ  
不飛行ハ必レくテ叶トね物有ルを思フ。子ハいヒ奇ト

抑扶木ト。若華何光トモ。華之美者。若木之華トモ  
言ヒ。此方也モ華トし云へシ。今モ此花子限る如く上代子ノ  
り此華ノ美艷を感ズ。かシこハ渡らるハ神聖トシ。の打任  
て木ト云ハ扶木字云ハ華トし云ハ此華を言ヒ。元ノ  
り彼国小真ノ山佐久良有ル。毎レる。華チふ字を都テ  
諸木ノ花ハ用ヒて。別ト類木れル。大佐久良ノ有ルを擣ト  
名ケて。其音はリと華トいヒ。所知とリ。然レた右ノ傳ノ  
子俗字ト云ハ擣字ト云へシ。古ノ故実を。然レた右ノ傳ノ  
知レる者ノ制レる字ヲらハ思ハる。然レた右ノ傳ノ  
記ス。木花開耶姫ノ木花子。華字と云ハ。南雅小木謂フ之華  
と有ル。子ハ叶子はコ天仁子ノ傳ヘ。故訓ノ。遍ニ殘ス



れる少や有む。その王仁<sup>因</sup>國より我人あり。彼國小佐久良な  
きてしを<sup>ハ</sup>知れり。櫻字<sup>ハ</sup>当しり決りて此人の態れり又唯木  
花と云ふ。よ。華字と当れむ故を以て。自歌ふも。この花と  
詠りと聞ゆると思ふへし。ま。華字のこよ非<sup>ハ</sup>彼國よ早  
く失へる字義の。此方の古也よ遺れるが甚多かり。そと一  
子<sup>ハ</sup>神典の古文よ妻子妹字字用ひ禊字と用ひ会所の  
情字字用ひしとるを<sup>ハ</sup>说文と始り彼國の古き字也どもよ  
所見ありき字義れるも早く此方よ兼る所あり。以て此方の  
て傳えれる字義あると思ひ合せて知べし。以て此方の  
神聖とち。彼処小渡り坐ては。彼扶蘇の故字以て。此方と木  
徳仁風の本域と稱し。この華の義れる者。此、木の花と  
る所以をもて。此域とや。て華とは稱せり其れ東華大神

君。青華小童君れと申せる。東華。青華。ま。太昊少昊れとの  
生れと華渚と稱し。神農の生所を華陽と稱せるも。皆是由  
小よるしかり。然ると後世の我人此古義を忘れて。南華  
西華れといふ熟語を割<sup>ハ</sup>。割<sup>ハ</sup>その國と<sup>ハ</sup>も。華夏中華の  
と稱する。其、君師の本國とる。神國の号を偷めるよて。僭  
上<sup>ハ</sup>色礼の極よ有れる。彼國<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>華と<sup>ハ</sup>自稱する由は。字  
義之華<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>嘉大也といふれと也。礼義の本を皇國より受て  
始りて知れるとるを<sup>ハ</sup>也。说文は。実ん<sup>ハ</sup>の大<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の受て  
例子依らば。大華と<sup>ハ</sup>謂ふべし。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。  
り。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。大<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>。  
華<sup>ハ</sup>青華といふ<sup>ハ</sup>。赤<sup>ハ</sup>縣大古<sup>ハ</sup>。四<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>八<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>木<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>東<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
傳<sup>ハ</sup>小童君の<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>。ま<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>べし。四<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>八<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>木<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>東<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
大樹の本よはひ靡るる年。○右の摺本も下は彫竟て後清の  
陳元龍が清皇の旨を奉て緋りし歴

代賦彙の草木部に我とる。唐の朱敦之扶桑賦といふ一章を也見し。其  
り也。全文より木臨大登名曰扶桑。賦洪波之萬里。在青帝之一方。受浩氣  
以生成。那倫衆木。挺仙才之秀麗。能戴朝陽。照五華之精英。鹿外凡吟。天  
涯而泣。山晴而瑞氣初動。梅曉而潮痕乍濕。幾千歲月。標下界之每雙。烟  
拔采枯。倚高冥。而獨立。霧折煙融。孤光在東長。迎旭日。先得春風。吾將原  
太極之意。考真宰之功。不產奇異。安分混同。物欲前垂。我則与三才並起  
國云化矣。我則与三才並起。車出古今莫渝。負固當乾坤之上位。駁與龍  
之要路。至若玉偏声殘。銀蟾影度。收入間之暝色。未遍羣山。峰海底。紅  
輪先經。此樹露戴。雲驚珠懸。發生雖凌。厥熾寧奪。茲采豈若。常材隨。大匠  
之雕刻。自如運補。契吾君之聖明。業之者不可得其窺。靈之者不可得其  
逸。陽鳥象。狀木也。此晴虹作挂。弓之勢。名大天下。身高水際。掩影翠於蟠  
挑病。虧盈於月桂。非海也。不足以容。其大非日也。不足以升。其高。葉茂而  
雲垂。露景根深。而龍撼。驚傳早。沃焦於尺土。微鄧林。以秋毫巨影。倒空而  
漠。寒声吹夜。以眩。靈境難。守人寰。罕測。性欺霜雪。心藏玉直。故能  
衆甫。而批滄溟。永佐東君之德。云へり。元本戴朝陽の下。一句を脱り。余  
の意を以て。これを補ふ。萌と明と作り。因田子作り。淪逾子作り  
並に誤写あり。是字改む。此文余が今の考子なり。相適ふ語とす。有り。  
深く感了る旨。あられ。採りて。此子附録とす。

天保七申年三月

### 大扶桑國考跋

竊嘗聞之矣。我神代之古。日出之  
域自有神木之奇。靈者其名為扶  
桑。扶桑之多。森蔚成林。栝櫟聳天。  
故遂名此國曰扶桑。若夫三皇之  
御。三才五帝之紹。五運亦咸出于  
我大扶桑之國矣。而扶桑之名。創  
見于山海經。賦于楚辭。書于鳴烈。

或散<sub>ニ</sub>出<sub>スル</sub>于詞人藻士之筆者固不  
遑<sub>ニ</sub>收<sub>ム</sub>峯也十洲之記見<sub>テ</sub>而志<sub>シ</sub>之通  
典之誤聞<sub>テ</sub>而錄<sub>ス</sub>之雖<sub>レ</sub>然未嘗聞<sub>カ</sub>者  
辨<sub>ハ</sub>涇渭於浩洋之間剖<sub>ニ</sub>玉石於磊  
砢之中者矣伏惟大壑平先生識  
潭於無底明徹於甘淵固是古今  
五千載之一人宇宙一万里之獨  
步也於是乎有大扶桑國考矣其

考證之密也分析絲毫而有感神  
哭鬼之妙議論之高也睥睨崑崙  
而有翻天覆地之力是以我大扶  
桑之所以為大扶桑者猶拂干其  
枝浴干其谷日在其上華光其梢  
也豈不千載之愉快万世之矚矚  
哉其然後我道益尊國愈貴矣萬  
不敏安敢贅多言贊一辭乎蓋其

為木也。即為<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>之化。為山。即為<sub>レ</sub>不二也。是其尤扶蔬于大人君子之國。拔<sub>レ</sub>于易州申土之上者也。然而先生乃引<sub>レ</sub>之不發。指<sub>レ</sub>之而未言。蓋其有心乎。萬誠為後進。而先生先使萬校訂此考。故玩味之。枕籍之。方始得髣髴恍惚。考索<sub>スル</sub>又華之所以為<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>華不二之所。以為

不二者矣。譬<sub>フ</sub>諸<sub>フ</sub>學<sub>フ</sub>射也。既<sub>ニ</sub>使<sub>ニ</sub>之<sub>引</sub>。則不得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>發。譬<sub>フ</sub>諸<sub>フ</sub>問<sub>フ</sub>路也。向<sub>ニ</sub>其<sub>所</sub>指<sub>サス</sub>孰<sub>レ</sub>陷<sub>ラム</sub>于大澤。畫<sub>キテ</sub>龍<sub>ヲ</sub>而缺<sub>キ</sub>隻<sub>ヲ</sub>鱗<sub>ヲ</sub>刻<sub>ス</sub>。虎<sub>ヲ</sub>而遺<sub>ニ</sub>一<sub>斑</sub>。雖庸<sub>ニ</sub>牛<sub>拙</sub>工<sub>ト</sub>可以<sub>レ</sub>繼<sub>ス</sub>其巧。助<sub>ク</sub>其<sub>牛</sub>矣。萬豈敢<sub>ニ</sub>曰<sub>ム</sub>補<sub>ハヒ</sub>遺<sub>墨</sub>。墨<sub>ヲ</sub>斷<sub>ル</sub>餘<sub>材</sub>哉。先生其亦有<sub>レ</sub>心乎。乃以<sub>レ</sub>萬所<sub>考</sub>索<sub>スル</sub>收<sub>ム</sub>諸<sub>本</sub>考<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>猶<sub>ホ</sub>不<sub>レ</sub>嫌<sub>ハ</sub>溝澮<sub>ニ</sub>之<sub>赴</sub>。以<sub>レ</sub>成<sub>易</sub>谷<sub>ノ</sub>之<sub>廣</sub>不<sub>レ</sub>厭<sub>ハ</sub>荊棘

之生○スルヲ以致テ青邱之茂○キヲス民虫○ス附テ驥尾○  
而行キ千里○蚤○蝨○借テ鶴翼○而翔ル九天○  
也。夫華非無○艷○於姦華者○而素葩  
電光○爛○編○馥○秘○輭○葉○如丹○滿○樹○如  
雪○頭戴○白雲○足○蹋○玉屑○畫○之○擲○筆  
賦○之○閑○舌○未嘗見○美○於○姦華○者○焉  
山非無○高於○不二者○而四面同形  
無有○凹凸○日月○潛影○鳴○鵲○不○頡○三

万丈上○巔平○氣○洲○四時積○雪○一莖○  
無○茁○未嘗見○奇○於○不二者○焉○詞人  
藻士愛其美○賞其奇○以為○華○王山  
君亦宜矣○雖然亦未嘗聞○有○考○索○  
其所以然者○焉○本考一出○而後此  
華益美○此山愈奇○矣○萬請謂○之○天  
下第一華宇內不二山○於是乎溥  
天之下率土之濱○雖有○牡丹亦臣○

千此王雖有泰山亦奴于此君也  
亦猶大扶桑之所以為大扶桑乎  
告

天保五年歲在甲午立冬日丁酉

門人 生田萬國秀謹撰并書

無極味書根茶茶不不備備備備  
食本以巖平康細細細細細細細細

